

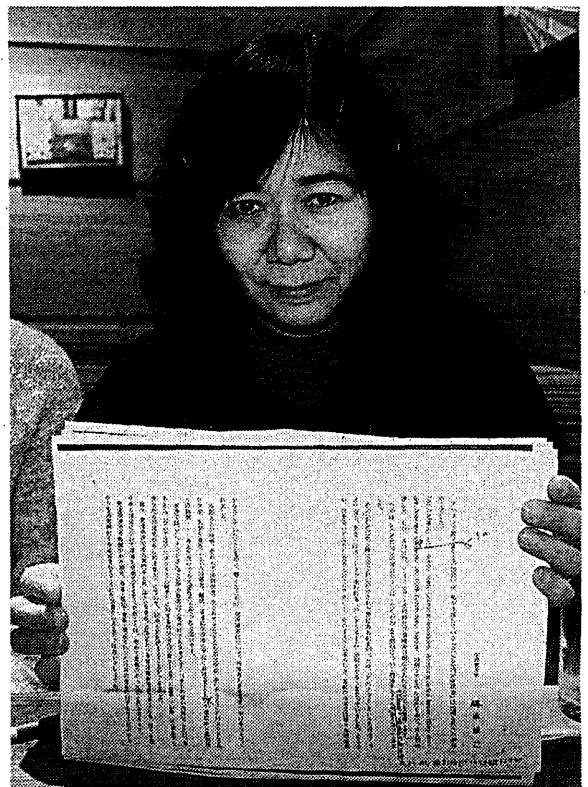
広汎性発達障害の糧原市の女性(54)が発達障害への理解を求める手記を書いた。47歳で初めて自分が広汎性発達障害だと知ったことや、同じ障害を持つ長男(17)を理解してやれなかった後悔の念などを綴った。幼いころ問題行動が多かった長男に、しつけとして暴力を振るってしまったことや、逆に長男から受けた暴力も赤裸々に書いている。

【黒岩播光】

長男の問題行動は保育園のころから始まった。友人をたいたり、けったり、かみついたりした。このころ女性は既に夫と離婚していた。親類や保育士に「母親のしつけが足りない」と言われ、「父親がいないのだから、私がしっかりしつければ」と長男を毎日のよう

ADHDの長男への暴力、後悔、赤裸々に

障害への理解求め出版検討



「発達障害を社会に理解してほしい」と手記を手に話す女性

な発達障害が併発していた。ほとんどの受け入れ先に断られたため、入所を余儀なくされた児童自立支援施設でも長男は暴れる行為を繰り返し、05年2月、少年審判で医療少年院送致が決まった。昨年3月から、長男は大阪府内の障害者グループホームで暮らしている。女性は、生活保護を受け1人暮らし。息子と2人で生きていく自信をなくし、自殺を考えたこともあったという女性は、

「今まで、自分は周りとは違っていて、周りに合わせようと必死だったけれど、自分に障害があると知って、ああ、自分は自分のままでいいんだとラクネスできるようになった」と話す。

梅永雄二・宇都宮大教授(発達障害心理学)は「当事者のほとんどは、自分が発達障害だと知ることで、自分の居場所を見つけたと喜んでいる」と話す。

ADHDの人や家族を支援するNPO法人「えじそんくらぶ」(埼玉県入間市)の高山恵子代表は「周囲と違っていることは間違っているというレッテルが張られやすい日本の価値観の中では、広汎性発達障害は理解されにくい」と指摘する。

自閉症関連の本を専門に発行する東京のある出版社は「母子そろって広汎性発達障害である当事者の手記は貴重で、社会への警鐘になるのでは」と関心を示している。

に何度もたいた。時には物差しで。「今、振り返ると、自分と息子の障害をしっかりと理解してさえいけば、暴力を振るうこともなかったかも」と女性は話す。

02年2月、長男は小学校5年の時、発達障害の1つ、ADHD(注意欠陥多動性障害)と診断され、障害に理解のなかった小学校の教諭は、長男が暴れるたびに「こいつは病気だから」と同級生に言い、「廊下で立って」と長男をしかつた。長男の状態は急激に悪化する。学校の消火器を振りまき、ガラスを割り、倉庫の壁に穴を開けた。今まで遊びに来ていた友人も、誰も来なくなった。

03年3月、女性は長男に腹をけられ、床に倒れた。長男は児童相談所に連れて行かれた。翌4月、長男は精神病院に入院。高機能自閉症とアスペルガー症候群などさまざまな

広汎性発達障害の女性が手記

news

それから